

# 東アジアにおけるラトウーレット (K. S. Latourette) の認識と受容過程

——日・中・韓3国の比較を中心に——

洪 伊 杓

## 1. はじめに

中国の宣教師出身であるラトウーレット (Kenneth Scott Latourette, 1884-1968, ライデネリェ 頼徳烈) は、アメリカ歴史学会 (American Historical Association, AHA) の会長として務めるほど、20世紀のアメリカを代表するキリスト教史学者であり、東洋史学者である。彼は近世以降、キリスト教の影響力が「前進 (advance), 後退 (recession), また前進 (advance again) を繰り返して世界を変化させる」<sup>(1)</sup> と信じていた。1948年12月29日、アメリカ歴史学会で行った「キリスト教的歴史理解」(The Christian Understanding of History)<sup>(2)</sup> という演説は、人類史をキリスト教の「拡張」(expansion) 過程とみなす彼の立場をよく示していた。彼は、キリスト教の総体的な影響力の拡大がまさに人類史であると考えたので、「教会史」(Church History) という表現よりは、「キリスト教史」(A History of Christianity) という表現を使った。彼の代表作『キリスト教拡張史』(*The History of Expansion of Christianity*, 1937, 総7冊) のタイトルにもその観点がよく現われている。また彼の処女作『中国の発展』(*The development of*

*China*, 1917)<sup>(3)</sup>と『日本の発展』(*The Development of Japan*, 1919)<sup>(4)</sup>も西欧のキリスト教文明が「近代化」、すなわち「発展」の前提条件であることを暗示した。したがって、ラトゥーレットの歴史観は、西欧の「キリスト教」、「帝国」、「宣教師」中心の史観であると言える。

本論考は、このような側面に着目し東アジア史及びキリスト教史を研究したラトゥーレットを東アジア三国（日・中・韓）が各々どのように受容、理解、批判して来たのかを比較検討する。この考察によって東アジア・キリスト教史研究の現在を検討し、未来の課題を研究史的観点から展望することができるだろう。

## 2. 中国における批判的な受容過程

### (1) 「中国学」研究者としてのラトゥーレット

1884年、アメリカのオレゴン州で生まれ、バプテスト教会の信者である両親の下で成長したラトゥーレットは、1904年にバプテスト系列学校であるリンフィールド大学 (Linfield College) で学部 (B.S.) を終えた後、エール大学歴史学科に編入し、1906年に学士学位 (B. A.) を、修士を経て1909年には博士学位を取得した。学生キリスト教運動 (SVM) の影響を受けた彼は、毎年D. L. ムーディーが主導するYMCAの宣教大会に参加し、「エール海外宣教会」(Yale Foreign Missionary Society) の役員としても活動した。この団体はエール出身であるホレイス・ピトキン (Horace T. Pitkin) が1900年に義和団事件で河北省保定<sup>バオディン</sup>で殉教したことをきっかけに設立され、1901年には「エール中国宣教会」(Yale-in-China Missionary Association) と改名し中国宣教に集中していった。1906年には湖南省長沙<sup>チャンシャ</sup>にエール学校 (雅礼学校) を設立し、1914年にはエール大学本科を正式に開設した。1910年に中国に到着したラトゥーレットは、2年間この学校で教えた。

しかし、アメーバ赤痢 (amoebic dysentery) に感染したラトゥーレットは帰国することになる。彼は治療を受けながらも1917年まで宣教師の身分を維持したが、中国への復帰はできなかった<sup>(5)</sup>。結局、彼は「宣教史」研究という新しい使命に目覚め、学者へと転向する。

ラトゥーレットのエール大学博士論文『中米初期関係史』(*The history of early relations between the United States and China, 1784-1844*)<sup>(6)</sup>は、彼の最初の研究書『中国の発展』と同年(1917)に出版された。このように「中国」はラトゥーレットの特別な関心対象であったが、彼の究極的関心はむしろ「宣教」であった。すなわち、「宣教史」の研究のため東アジア、特に中国を選択したのである。このような「宣教史」的な観点は、1921年からエール大学神学部で宣教学及び東洋史教授として活動し始めてから、より本格化して行った。その代表的な成果が930ページに至る大作『中国キリスト教宣教史』(*A History of Christian Missions in China*, 1929)である。その後、最も有名な一般の中国史書籍である『中国の歴史と文化』(*The Chinese: Their History and Culture*, 1934)<sup>(7)</sup>にまで研究領域を拡大して行った<sup>(8)</sup>。

19-20世紀のアメリカでの中国学には、二つの観点が共存した。一つはヨーロッパ啓蒙運動による「理想化された中国」であり、もう一つは19世紀以降に直接目にした「落伍した中国」であった。この相反するイメージの衝突の中で中国研究はより具体性を保持して行きながら、エール大学は米国における中国学の中心地となった。この大学の最初の中国文学科教授であり、著名な『中国総論』(*The Middle Kingdom*, 1848)<sup>(9)</sup>の著者であったサムエル・ウィリアムズ (Samuel Wells Williams, 1812-1884, 衛三畏)も中国の宣教師であった。彼の息子であるフレドリック・ウィリアムズ (Frederick Wells Williams, 1857-1928)は、父に続いてエール大学で中国学を教え、ラトゥーレットの博士論文も彼が指導した。ラトゥーレットの代表作『中国の歴史と文化』も、

その構成と観点においてサムエル・ウィリアムズの『中国総論』をそのまま継承したものである<sup>(10)</sup>。

## (2) ラトウーレットの中国キリスト教史認識

ラトウーレットの回顧録『限界を越えて』(Beyond the Ranges, 1967)をみると、中国で出会った宣教師に対して「欠点があり多様な性格の人々であったが、彼らには共通する献身と忠誠心によって結ばれ、思いやりが満ちていた」<sup>(11)</sup>と記録した。『中国キリスト教宣教師史』(1929)でも類似する評価を繰り返し、中国で展開されたキリスト教の宣教活動は、「多くの貢献と誤りが共存するが、結局宣教師は中国人に有益になる方向へと献身した外国人集団であり、純粋な利他主義と英雄的信頼が人類の歴史を飾った」<sup>(12)</sup>と結論付けた。李在根はこのようなラトウーレットの歴史観が「イエスの代理者(agent of Jesus)としての宣教師」<sup>(13)</sup>に注目したものであると評価した。すなわち、宣教師がキリスト教の影響力を広げるために努力したという側面を強調したのである。またラトウーレットは西洋、特にアメリカが中国に代表される東洋にどのような影響を及ぼしたのかを究明することに力を注いだ<sup>(14)</sup>。この点を論証するため中国宣教の八つの成果を示したラトウーレットは<sup>(15)</sup>、その影響を受けた代表的人物として孫文を挙げた。晩年に書いた回顧では「毛澤東と劉少奇が長沙の学生だったが、エールが建てた学校の学生ではなかった。もし彼らがうちの学生だったら、彼らの未来と中国の未来は完全に変わったはずである」<sup>(16)</sup>と述べた。

ラトウーレットは近代歴史学の方法論に充実し、一次史料の活用を主張<sup>(17)</sup>してできるだけ客観的な記述を目指して努力した。しかし、宣教師出身として宣教師への肯定的な解釈を行ったということを率直に告白した。同時に、プロテスタント宣教師として、景教、正教会、カトリックなどの敘述に対しても公正ではない点も認めた。また、「宣教師の活

動と中国人の反応も共に考察しなければならない」<sup>(18)</sup>と述べたが、宣教師史料への依存が強く、その目標を果たすことができなかった。彼も中国人が不満を感じる可能性がある、と自らの限界を認めた<sup>(19)</sup>。

さらに、宣教師が中国に及ぼした破壊的な影響も認めた。「太平天国の乱」(1850-1864)、「辛亥革命」(1911)のような社会的混乱の惹起、宣教師保護のために外国軍隊が上陸し結局は中国国家体制が崩壊した事実も認めた。また伝統的な家族制度の崩壊と満洲帝国の没落などと宣教師との関わりも認めた。しかし、ラトゥーレットはこのような否定的結果にもかかわらず建設的解釈ができると考えた。例えば、家族文化の崩壊によってむしろ倫理道德の標準が高くなり、中国が新しい社会に変化していったと強調した。宣教師は西洋に中国について知らせた先駆者であり、病院や学校を建てて中国人の幸福を追求、増進させたと信じた<sup>(20)</sup>。彼の中国関連著書は、ほとんどが宣教師によるキリスト教拡張の歴史が倫理道德を改善させ発展を導いたという楽観的「勝利主義」(triumphalism)の歴史観を表していた<sup>(21)</sup>。

### (3) ラトゥーレットが中国の「中国キリスト教史」研究に及ぼした影響

ラトゥーレットは、古代ローマ文明のように古代中国の伝統文化も優れていたが、道德重視の儒教文化に埋没してしまい、結局は近代化への機会を失ったと批判する、二重の態度を見せた<sup>(22)</sup>。「孔子加耶蘇」という表現で、儒教とキリスト教の合一を模索したサムエル・ウィリアムズ<sup>(23)</sup>と異なり、中国で新しい文明を建設するためにはキリスト教が拡張(expansion)して勝利しなければならず、伝統文化や制度は破壊しなければならないと主張した。彼は西洋文化が中国を救うことができると信じ、特に中国へのアメリカの責任<sup>(24)</sup>を主張した。

すべての国際関係と政策の背後にはキリスト教があり、特に東アジア地

域で前代未聞の良い機会を迎えている<sup>(25)</sup>。

このようなキリスト教「勝利主義」の観点から、「阿片戦争」も弱小国には正当な事件であり、中国にも結局良い結果を生んだと主張するなど、キリスト教の不義に対しても肯定的に評価した<sup>(26)</sup>。20世紀初からアメリカが急浮上したので、そのような確信はより強化された。

1000年の中国キリスト教史をまとめた彼の代表作『中国キリスト教宣教史』(1929)に対して、1950年代初に延慶大学宗教学院の蔡咏春と趙紫宸は「中国キリスト教史研究のための唯一の既成教科書」<sup>(27)</sup>と高く評価した。しかし、序文で「西洋研究者として中国人が願うような十分な敘述ができなかった」<sup>(28)</sup>としているように、彼らはラトゥーレットが1926年に持っていた西洋教会の史料だけを参考にして義和団事件以降の独立教会運動など、中国人の活動が紹介されていないと批判した<sup>(29)</sup>。このようなラトゥーレットの中国キリスト教史の敘述観点は、それ以降に出版された諸本でもそのまま継承されている。しかし、中国キリスト教史を体系的にまとめた学者は、中国人の中にもいなかったと、彼の学問的価値は認めた。

ラトゥーレット以前に中国人が執筆した中国キリスト教史<sup>(30)</sup>は、そのほとんどが単に事実を並べている水準であった。そういう状況で西欧の近代史学の方法論に基づいて、ラトゥーレットが『中国キリスト教宣教史』を発行すると、中国のキリスト者は大きな刺激を受けた。その影響で登場した書物がまさに南京の金陵(きんりん)神学院教授、王治心<sup>ワンジイ</sup>の『中国基督教史綱』(1940)である。王治心は、15年間『金陵神学志』に連載したものを集めてこの書物を出版した。この本は既存の通史書と比べると、最も体系的で完成度も高い著述であると評価される。

薛<sup>ソル</sup>チュンスは、王治心のこの書物がラトゥーレットの『中国キリスト教宣教史』と構成と形式において以下のように重なる部分があるほど

非常に類似するとした。

区分	ラトゥーレット <i>A History of Christian Missions in China</i>	王治心 『中国基督教史綱』
中国キリスト教の起源	景教	景教
第2章	中国の宗教的背景	中国宗教背景
第3章	キリスト教の独特性と中国におけるキリスト教の受容可能性に関する関係	キリスト教教義と中国との関係

構成の類似性にもかかわらず、史料選択の問題では根本的な差を見せる。すなわち、キリスト教史を宣教史として見るか、あるいは受容史として見るのかという観点の問題において対立する。宣教師の史料とその立場に重点を置いたラトゥーレットと異なり、王は自分の執筆動機について第一、キリスト教と中国の固有宗教習慣の融合の可能性、第二、キリスト教が中国の文化に及ぼした影響、第三、中国でのキリスト教発展の明暗の比較、第四、中国でのキリスト教事業が新中国建設にどのような寄与をしたのか、などであった<sup>(31)</sup>。王のこのような観点から、そのほとんどを受容者である中国人の立場から敘述した<sup>(32)</sup>。

ラトゥーレットは、儒教が長年にわたって社会安定に寄与して来たので、キリスト教は儒教を充分に理解する必要があるとしながらも、究極的にキリスト教の優越性を強調した。すなわち、儒教を尊重しすぎると、結局キリスト教が吸収されキリスト教の特殊性を喪失する危険性があるとした。したがって、伝統宗教の中で中国社会に役に立たないものは攻撃して消滅させ、キリスト教と取り替えなければならないとした<sup>(33)</sup>。すなわち、キリスト教による中国文化の征服を目指す優越意識を持っていたといえる。

これと比べて王は、中国人は宗教的に偏見がなく、自由であるので外来宗教に対しても寛容だとし、儒・仏・道教三宗教の共存がその証拠であると考えた<sup>(34)</sup>。このような宗教伝統の中で、中国人はキリスト教との対立を避け、融合の道を模索しなければならないと主張した<sup>(35)</sup>。すなわち、ラトゥーレットはキリスト教が勝利するため一時的な適応主義は認めたが、最終的には中国伝統宗教文化は消滅させるべきであると考えた一方、王は伝統宗教との共存を模索したのである。

#### (4) 現代中国におけるラトゥーレット研究の現況と展望

ラトゥーレットの宣教史観は、これまで「反帝国主義」的な視点からなされた中国キリスト教史研究において歓迎されなかった。しかし、最近のグローバル化の流れによって新しく考察されている。ラトゥーレットの代表作『中国キリスト教宣教史』(1929)も1950年代に翻訳が着手されたが、完成までには至っていなかった。その後『現代中国史』(1963)<sup>(36)</sup>が翻訳出版されたが、未完成であった『中国キリスト教宣教史』は、最近(2009)香港で完成され出版した<sup>(37)</sup>。そのようなラトゥーレットへの新たな関心は、まず王治心の『中国基督教史綱』とラトゥーレットを比較する研究論文<sup>(38)</sup>をはじめ、学位論文<sup>(39)</sup>にまで発表されることになった。特に北京外国語大学でラトゥーレットに関する博士論文を提出した王思聰<sup>ワン スーフォン</sup><sup>(40)</sup>は、米国の中国学に業績を残したラトゥーレットに注目して(1)中国文化史、(2)中米関係(政治)史、(3)中国キリスト教史の三つの項目に分けて多様な領域を複合的に扱わなければならないと強調する。台湾でも2014年発表された曾慶豹<sup>ワンチンバオ</sup>の「近代中国基督新教史研究述評」<sup>(41)</sup>という論文でラトゥーレットを言及するなど、彼に関する関心が中華圏で少しずつ生じている。また1920-30年代の中国キリスト教の指導者である劉廷芳<sup>リュウチンファン</sup>(1891-1947)がエール大学神学大学院に留学した時、ラトゥーレットとどのような関係があったか、

東アジアにおけるラトゥーレット (K. S. Latourette) の認識と受容過程

に関しても重要な研究課題である<sup>(42)</sup>。

『中国キリスト教宣教史』(1929)は膨大な史料に基づいた最初の学術的な「中国キリスト教通史書」という点において偉大な業績である。カトリック、プロテスタント、正教会についてバランス良く述べられたエキュメニカルな観点も高く評価される。しかし、西洋宣教師の活動と史料に偏重して敘述したことは大きな問題として残る<sup>(43)</sup>。これまで西洋帝国による侵略に対する被害意識が強かった中国は、最近では米国など西洋文明と対等な関係から歴史を再評価し始めた。そのような意味において、ラトゥーレットの中国研究と中国キリスト教史の成果に対する再評価も必須の課題として中国で新しく注目されている。

### 3. 日本における政治的な受容過程

日本のキリスト教界においてラトゥーレットは広く知られていない。1919年に『日本の発展』(*The Development of Japan*)を出版したが、ほとんどの研究が中国に集中していたからである。しかし、1980年代に初めて彼の著作が翻訳された韓国と比べると、日本は1930年代にすでにその著作が翻訳、紹介されていた。その時期は満州事変(1931)以降の戦時下に集中する。それは、「大陸進出」のために中国理解が必須の状況で、国家的な次元でラトゥーレットの研究が注目されたのである。ここでは、日本において、誰が、どのような動機でラトゥーレットの諸本を翻訳し、紹介したのかを分析し、その受容過程の意味を明らかにする。

#### (1) キリスト教史「通史書」におけるラトゥーレットの登場時点

日本のキリスト教史「通史書」にラトゥーレットが初めて登場したのはいつかを考察することは、彼が日本で注目された時点を把握するた

めに重要である。まず文学士である藤谷深励が、西洋の通史書二冊<sup>(44)</sup>を参考にして1909年に発行した『基督教史』<sup>(45)</sup>がある。この書物は最後の章で「欧洲以外のキリスト教」を扱いながら「インドの布教」、「支那の布教」、「ビルマ地方」、「日本のキリスト教」、「朝鮮」、「西部亜細亜」、「シリア・エルサレム」、「コンゴ共和国」、「大洋諸島」、「基督教化の結果」などを紹介している。明治時期（1909）にすでにアジア、アフリカの教会史を敘述範囲に含めていたことは、帝国を志向した日本の学者の姿勢をうかがわせる。この本の発刊意義も、信仰的動機によるキリスト教研究の目的ではなく、西欧の近代性を早く習得し、西欧帝国を模倣しようと考えた明治知識人の観点が反映されている。

（二人の神學者の）神學的研究の缺陷を補ひ、又一般基督教の研究者に公平なる資料を供し、以て我が精神界に貢獻することもあるべし。尚本書の内容に關しては文學士 後藤朝太郎氏の助言を得たる點少なからず。末筆ながら茲に明記して謝意を表す<sup>(46)</sup>。

藤谷と協力した後藤朝太郎<sup>(47)</sup>は、東京帝国大学出身の言語学者として当時最高の「中国通」だった。このように、非キリスト者である研究者が西洋のキリスト教通史書を精読し、単純な翻訳でもない自らの観点を反映させて『基督教史』を編纂した点は、日本におけるキリスト教史の編纂が持つ重要な特徴である。すなわち、西洋文明の一面を担うキリスト教に注目し、信仰と布教の手段ではなく客観的な研究対象としてキリスト教史を敘述して日本の近代化に参考としたのである。

基督教の傳播に伴ひ自ら生じ來たる學問は上にも述べたる如き言語の研究を始め其の他、文學 (Literature)、人類學 (Ethnology)、植物學 (Botany) の如きものの研究の端緒を見るに至れり。かくて新領土は漸次吾人の知識

内に入り、新部落新民族は漸次文化の風に化せられ残忍野蠻の風俗もいつしか法律と秩序とを見るに至り茲に平和の君の下に統治せらるこれ一般開明に向ふの順序なり。以上基督教史上を通覧するに其の布教は非常なる困難にあひ、多大の妨害を蒙り殆ど教化の望みなきが如き失敗の上に失敗を重ねること、是れ布教の歴史上常に見るところなるが、吾人は基督教がかくの如き苦境を凌ぎて而かも布教事業 (Missionary enterprise) の近世史上に於ける成功は實に驚くべきもの有るを見るなり。又以つて基督教義と及び布教師の堅忍不拔の精神を顧みて大いに尊重するところなる可からざるなり<sup>(48)</sup>。

この結論は、彼らの『基督教史』研究の動機をよく現わしている。日本以外のアジア地域は前近代的「残忍野蛮」として区別した後、そこを文明世界の新領土として確保しようとする期待感を露出した。その結果、西洋の宣教師の奮闘は日本が植民地建設において向い合う困難さの先行学習資料になった。したがって、宣教師の業績に対して敬意を表している。このような態度は、西洋の「帝国主義」を肯定する観点を受け継いで「脱亜入欧」を通して日本の新しい使命を強調している。したがって、非キリスト教界によって執筆された初期日本のキリスト教史「通史書」では、ラトゥーレットを直接参考にはしていなかったが、すでにラトゥーレットの「宣教師中心」、「帝国主義中心」の史観を受け入れていたことになる。

その後、「日本基督教会」の教会史家である郷司健爾 (1887-1948) も『基督教史』(1930)を著した。青山学院神学部の教会史教授であった気賀重躬 (1901-1958) も『概説教会史』(1932)など<sup>(49)</sup>を発行したが、これらはまだラトゥーレットの成果を参照 (引用) せず、またアジア・キリスト教に対する関心も全くない。その理由は、満州事変(1931)直後で、まだ大陸進出に対する関心が高まる前であったからだ。しかし

1934年に石原謙が発表した通史書である『基督教史』<sup>(50)</sup>からラトゥーレットの著述が本格的に登場する。石原も既存の通史書のような構成を見せるが、最後の第7節で「東洋伝道、特に支那及び日本の基督教」を扱い、「中国」(支那)に対する関心を追加させた。これは1932年3月1日に満洲国が樹立すると、中国大陸への進出に対する関心が高まりキリスト教史の分野でも「中国宣教の歴史」への関心が高まった結果であった。

石原は第7節で中国人に対して「地上的人間的興味から離れることの出来ない全く現実的、実在的な民族である。彼等には(略)終末観的な来世希望に対する神学的理解もない」<sup>(51)</sup>と否定的に評価しながら、その過程でキリスト教も「政治的、社会的、家庭的、道徳的な生活理想を実現する単なる手段たるに留まる」<sup>(52)</sup>と中国のキリスト教歴史に対して低い評価を下した。この時、西洋人宣教師も認めることを願いながら石原が引用したのが、まさにラトゥーレットの代表作『中国の歴史と文化』<sup>(53)</sup>であった。

されば、此民族的性向が根本的に陶冶されるに非ざれば、彼等の伝道教化は外面的に終る恐れがある。近時カトリック教会を始めプロテスタント宣教師も支那人の生活及び思想に同化する必要を認め、かの『支那伝道史』<sup>(54)</sup>の著者ラトゥーレットの如きも従来の経験を総合して「強力に国民的な今日の支那に信仰が生き抜かうとするには、同情と指導とに於てより多く支那人的にならなければならないのは明白である」と語って居り(K. S. Latourette, *The Chinese : Their History and Culture*, 1934, vol.1. p.487.), そして其は確かに経験ある伝道者の貴い忠言であるが、問題の帰着する所は寧ろ彼等の靈魂を本質的に教化して福音の秘義を正しく理解せしめ得るか、彼等の靈性の中に純粋なキリストの救ひの確信を養ひ得るかに存する。此點で我々は容易に破り難い障壁に突き當ることを覺悟しなければならない

東アジアにおけるラトゥーレット (K. S. Latourette) の認識と受容過程  
のである<sup>(55)</sup>。

ラトゥーレットの『支那伝道史』(1929)はまだ日本語に翻訳されていなかったが、満州事変直後から日本の神学界でもラトゥーレットに注目し始めたことがわかる。続いて石原は、教会が国家主義に適応すべきであると次のように強調する。

かくて教会は以前には政治から独立して存在することを得また其自由を努力したが、今はかゝる国家的体制の下に適應するに非ざれば存立し難くなった。従って問題は、如何にしてかゝる情勢の下に教會的生活と信仰思想の内容とを調整すべきであるか、また之によって生ずる我々の個人的な信仰の問題を如何に解決すべきかといふことに向つて来るのは必然である<sup>(56)</sup>。

このように、戦時下における日本のキリスト教の進路を妥協の道へと導いた石原の観点には、帝国主義を肯定的に評価したラトゥーレットの史観が影響を及ぼしたはずである。石原は、最後の部分で「特に支那伝道史としては下の文献を参照する」<sup>(57)</sup>と「K. S. Latourette, *The History of Christian Missions in China*. 1929.」を明記して読者に紹介している。

## (2) 日本におけるラトゥーレットの紹介過程

### a. 中国における日本人新聞や雑誌に登場したラトゥーレット

1921年(大正10年)12月2日に発行された「満州日日新聞」には、「支那の国際化と鉄道、満蒙鉄道は其の範囲外」というタイトルの記事<sup>(58)</sup>でラトゥーレットが登場している。この新聞は国際共同事業を展開するためには、腐敗と無秩序が極まる中国に対して強い不信を表し、国際規

定に即した方法では到底彼らを扱うことができないとした。

現在の支那のように理論と実際の距離が余りに隔って居るところに対しては、原則の実際の適用が殊に至難の問題となる。支那に向って政治的国際共同管理を行うという事は、主権侵害、内政干渉ともなるから、之は軽々しく出来ないが、さればとて腐敗、索乱の無秩序の極に達し、独立国家としての体裁も内容も整って居ない現在の支那が、一切の□□国権を回復して、其儘直ちに庶政の実績を挙げ得る道理はなく、関係各国としても、対支利害関係の非常に込み入って居る上から見て、その関係を新たに立直すという事も容易な事柄でないから、此間何等かの便法を發見し、そして変通機宜の手段を講ずるより外に良策はない<sup>(59)</sup>。

このような中国の複雑な鉄道問題について、ラトゥーレットは米国の立場を代弁し次のような方策を出していたが、上記の日本人新聞がそれを報道している。

支那の鉄道問題については、米国の一部で数年前から其の整理解決案が講ぜられ、ラトゥーレットと云う米国人は、その解決案として（一）借款から生じた現在の認許と特権とを廃棄する事、（二）現在の債務を一律に国際化し同時に借款の全部を国際化する事、（三）支那政府に政治的価値ある線路の監督管理権を附与する事、（四）鉄道全部を国有として一制度に統一する事、その他材料購入等に関する事項を挙示して世間に問うた<sup>(60)</sup>。

中国の鉄道をめぐる利権葛藤問題に対するラトゥーレットの「国際化」提案に日本人も注目している。ラトゥーレットの意見は、結局アメリカの利益を念頭に置いたように見える。しかし、この記事は、「国際化」に注目しながらも、それによって日本が「日本-朝鮮-満洲-モンゴル」

につながる鉄道の利権を喪失することになるのではないかと不安を感じている。ラトゥーレットの「国際化」概念に注目しながらも、米国の利権を警戒するという矛盾する態度を見せる。これは英米を排撃しながらも、結局ラトゥーレットの帝国主義的な勝利主義の歴史観は受容した日本（政府）の態度に類似する。

また、中国の上海で1932年に発行された日本語雑誌『支那研究：支那研究及び研究機関に関する調査』には、ラトゥーレットが作成した論文が載せられている。「支那調査機関の連合への提唱」という特集号に載せられた諸論文の中に「中国歴史研究に関する文献/ケイ・エス・ラトゥーレット」<sup>(61)</sup>が含まれている。中国駐在の日本人が遂行した中国の調査において、ラトゥーレットの先行研究と中国に関する研究成果は重要な参考資料として評価を受けていたことが確認できる。

#### b. 岡崎三郎訳の『支那の歴史と文化』（1939-41）

満州事変以降、ラトゥーレットが僅かに引用されることはあったが、彼の著書の翻訳出版はなかった。しかし1937年の「日中戦争」以後、中国での支配力が強化されると、政府主導の中国研究支援も拡大した。その代表的成果の一つがまさにラトゥーレットの *The Chinese : their history and culture* <sup>(62)</sup> の完訳書、『支那の歴史と文化』<sup>(63)</sup> である。翻訳した岡崎三郎（1907-1990）の訳者序文を見ると、ラトゥーレットを次のように紹介している。

本書はケネス＝スコット＝ラトゥーレットの『支那人、その歴史と文化』（*The Chinese : Their History and Culture*, by Kenneth Scott Latourette, First edition, 1934, 2 vols, Second edition revised, two volumes in one, 1934, 1938, New York）の前半の邦訳である。ラトゥーレットは、エール大学の宣教及び東洋史の教授である。原著が書かれたのは、おそらく1933年以前で

あって、その後、極東の状況には著しい変化が起つた。本書に支那の現状として描き出されているところの中には、既に過去の状態として過ぎ去り、今日の事態とは異なったものがある。読者は、常に原著が書かれた年代を念頭に置いて本訳書を読んで頂きたい。しかし、特に必要と思われるところには訳註を附記して置いた<sup>(64)</sup>。

日本で初めてラトゥーレットの単行本が完訳されたのは、このように非キリスト教的な一般中国史書籍であって、この本を翻訳した主体もキリスト教とは無関係である日本政府及び企業、マスコミであった。何故ならば、この本の翻訳者である岡崎は、日本の「南満州鉄道」が満洲に派遣した調査員であったからだ。岡崎は1929年に東京帝国大学文学部仏文科を卒業した後、1901年に設立された通信会社デンツ（電通）の記者、満州鉄道東亜経済調査局の調査員として大連等で活動した人物であるからだ。

1905年、日露戦争に勝利した日本は、「長春-大連」間の鉄道経営権をロシアから譲り受けることになる。その結果、大連に「南満州鉄道株式会社」（以下「満鉄」）が設立された。初期に鉄道運営にのみ力を注いだ「満鉄」は、徐々に情報、金融、土地管理にまで範囲を拡大して行った。結局「満鉄調査委員会」<sup>(65)</sup>を設置し、1907年から8年間朝鮮と満洲一帯の調査、研究を展開する。その時、朝鮮と満洲の地理、歴史、鉱物などの全方位的な調査が行われた。「満鮮地理歴史調査室」は1915年に閉鎖されたが、「満鉄」はその後、東京帝国大学に続けて資金を支援し、その成果として『満鮮地理歴史研究報告』（総16冊）を発刊し、大陸侵略の基本資料及びいわゆる「満鮮史観」の根拠を生み出していった。その後、満鉄の機能が広がると満鉄周辺の警備のために関東軍が進出する。結局、満洲は民政と軍政が混在する独特な空間になった。その結果、1931年9月18日に満州事変が勃発し、1932年に満洲国を建て、5

年後(1937)には「日中戦争」が可能な軍事的基盤を備えることとなった。

まさに、このような時期に岡崎が満洲で調査員として活動し、その一つの成果としてラトゥーレットの代表作『支那の歴史と文化』を日本語で翻訳した。しかし、岡崎はすでにラトゥーレットの本を翻訳出刊する6年前の1933年にもバックストン (L. H. D. Buxton) の『支那』<sup>(66)</sup>を翻訳し、1942年には中央公論社から岡崎の名で『支那問題辞典』<sup>(67)</sup>を編纂した。この辞書の中で「イギリスと支那」(25頁)、「度量衡」(575頁)などの文章を載せた。日本メソヂスト教会の代表的な教会史学者であった比屋根安定もこの本に「列國の對支宗教活動」(770頁)という文章を載せている。このように、日本でのラトゥーレット翻訳は、日本帝国の大陸進出を実現させる過程において、中国(満洲)地域の調査活動支援により「非キリスト者」である知識人の私的な好奇心と成就欲によって達成された。

### c. 同年同名の日本語著作『支那の歴史と文化』(1941)

注目すべきは、ラトゥーレットの本『支那の歴史と文化』の第2版が出刊された同じ年(1941)、「中国非国論」を主張し満洲国建国を擁護した京都帝国大学史学科教授でえる矢野仁一(1872-1970)と第6高等学校教授であった内藤雋輔が共著で出版した本のタイトルが同じく『支那の歴史と文化』(1941)であったことだ。矢野は日本国内に中国に関する書物が多いが、どの書物も「支那(人)を知るといふことではない」<sup>(68)</sup>と批判しながら、むしろ西洋人の「中国史」研究に価値を認め、ラトゥーレットについても言及している。矢野仁一はこのすでに1933年の著書でもラトゥーレットを紹介している<sup>(69)</sup>。

欧米人の(略)支那に關する著書には歴史的に書かれたものが非常に多い。古いところでコムト、ポーチェーの中國総論、ウィリアムスの中國総論、

デイヴィスの支那，マルティンの支那より，新しいところではコルディエー，モース，ドーグラス，ラトゥーレット，ジョセフ，クライド，モース，およびマクネアーらの支那に關する著書に至るまで，皆，その例で，ほとんど数ふる違がない。支那に關してさへこの通りである。今日東亜新秩序の建設，大東亜共榮圏の建設といふことがわが國の國策となり，わが國民運動の目標となつてゐるが，この東亜なり，大東亜共榮圏なりの範圍に法要せらるべき支那以外の東亜諸國を眞に知るといふこと，すなわち歴史的に知るといふことについては，わが國において現在のところでは欧米人の著書による外，ほとんどその便宜がないといつてよい。大東亜共榮圏以外のアジア諸國に關してはなほさらである<sup>(70)</sup>。

矢野は、これから日本帝国が新しい「東亜新秩序」と「大東亜共榮圏」を建設して行かなければならないのに、ラトゥーレットなど西洋人の中国史研究以外には日本語のまともな研究がないという点を慨嘆した。ラトゥーレットに対する肯定的な評価とともに矢野は次のように求める。

日清戦争，日露戦争当時の政局などは日本の学者が欧米人に教へてやらなければならないはずであるのに，学者でもない欧米人に日本の学者が教へられなければならないことは誠に悲しむべきことである。これは東亜新秩序の建設，大東亜共榮圏の建設において指導者たるべき使命を有するわが國として重大な欠陥といはなければならない。わが國として（略）全アジア諸國および諸民族に關して，歴史的にその現状を説明するに資すべき必要なる知識を，（略）現今においてわが國の到達し得べき最高標準を示すものとして記録し，今後の不斷の努力と補正とによつて漸次完全に達せしむべき發足の道標を建立することは，實に今日の一大急務といはなければならない<sup>(71)</sup>。

特に矢野が残した『満洲国歴史』(1933),『満州近代史』(1941),『大東亜史の構想』(1944)などの著述を見ると、満洲国建設と「大東亜共栄圏」建設の論理を歴史学的、理論的に裏付けている。徹底的な日本の帝国主義膨張論に基づいた東アジア史観を展開した矢野の観点は、西欧キリスト教の膨張を強調したラトゥーレットと通ずる部分がある。また、中国史研究者としてのラトゥーレットの情報は日本帝国の大陸進出のためにも重要であると考えられた。

代表的な朝鮮史研究書である『朝鮮史研究』<sup>(72)</sup>の著者、内藤雋輔(第6高校教授)も同じ本の序文で次のように大東亜新秩序の建設のため執筆に参加したと明らかにしている。

今や支那事変も第五年目に入り、御陵威の下、一億一心、国家の総力を挙げて東亜新秩序の建設は着々として進められているが、変轉窮りなき世界情勢と料り知るべからざる支那民族の生活力とは前途なほ多難なるを思はしむるものがあり、皇紀二千六百一年の劈頭に当たり、国民の決意さらに新なるを要するこの際、新東亜建設のために本書がなんらかの職域奉公を完遂することを得ば編者望外の光栄とするところ、(略)<sup>(73)</sup>

このように1940年前後にかけて中国侵略のために必要な情報として日本に紹介されたラトゥーレットの『支那の歴史と文化』(1939-41)は、日本人学者によって作成されたもう一冊の『支那の歴史と文化』(1941)が世に出るよう刺激した可能性が高いといえる。

#### d. 中国キリスト教史研究の急増

1940年前後にはキリスト教神学者による中国キリスト教史研究書も急増する<sup>(74)</sup>。まず、1937年の日中戦争勃発以後に中国に対する関心が高まると、1940年に日本メソヂスト教会の代表的教会史家である比屋

根安定が『支那基督教史』<sup>(75)</sup>を出版した。しかし、比屋根はラトゥーレットについては全く言及していない。

しかし、溝口靖夫（神戸女学院）の『東洋文化史上の基督教』<sup>(76)</sup>は「印度と支那」を中心にアジアキリスト教の歴史を詳細に上述しているが、半分以上を「支那」を扱うことに割き、ラトゥーレットの著作 *A History of Christian Missions in China* (1929) などが本の全般に渡って頻繁に引用され、登場している。特に「ラトゥレット博士は、このシリヤ語の祈禱書については…報告に基くのであらうと言って居る」<sup>(77)</sup> や「ラトゥレット教授もこの説を採用している」<sup>(78)</sup> という表現のようにラトゥーレットの学問的な権威を認め信頼できる根拠として提示している。

### (3) 戦後のラトゥーレット理解

#### a. ICU理事長赴任とキリスト教関係書の翻訳

：『福音と教会と世界』（1950）、『キリスト教の歩み』（1968）

敗戦直後、「国際キリスト教大学」（ICU）の財団理事会理事長であったディッフェンドルファー（R. E. Diffendorfer）が亡くなると、その後任者としてエール大学で働いていたラトゥーレットが1951年から理事長職を継承した<sup>(79)</sup>。それによって、1950年代以後から彼の日本関連著述が急増する<sup>(80)</sup>。また、彼のキリスト教関連著作が日本のキリスト教界で本格的に翻訳される。代表的なものが日本聖書神学校の創立者、岡田五作（1900-1977）牧師が翻訳した『福音と教会と世界』<sup>(81)</sup>（1950）である。この本の序文は日本で改革派の宣教師として活動したシェーファー（Luman James Shafer, 1887-1958）が作成した。

本書は、一九四七年六月、（略）数回に亘って、ケネス・スコット・ラトゥレット博士の議長の下に、委員会を開き、最初は、しじされたる主題

が含むところの問題の全領域に亘り、全く自由に、漫然と討議し、(略)本書の中、特に日本の読者に対して注意を促したく思う二つの章がある。その一つは、第四章であつて、これは、ラトゥーレット教授のキリスト教の初代より現代に至るまでの、その伝播の歴史に関する、長年に亘る研究の結論が、ようやくされてしるされているのであつて、その全体の研究は、彼の不朽の業績たるキリスト教伝播史として著されているものである。故に、本章は、彼のこの大著を手にし得ざる読者にとつては、特に貴重なるものでなければならぬ。(略)願くは、本書が、日本を急速に、キリストにまで導かんとする念願を、その心のうちに懐く人々に、極めて有用なる書として、役立ち得んことを、心より切望するものである<sup>(82)</sup>。

シェーファーは、ラトゥーレットが主筆として、著名なアメリカの神学者たちによる共著『福音と教会と世界』の内容の中でも、日本人読者に必要な情報がラトゥーレットの生涯にわたる歴史敘述作業が凝縮された第4章「歴史の展望に於ける今日の教会とキリスト教社会」<sup>(83)</sup>であると評価している。この本の編纂は、以前まで非キリスト教界で「中国史家」として広く知られていたラトゥーレットを、日本キリスト教界にキリスト教史家(教会史家)としてその名を刻むための重要な契機になった。

1950年代、キリスト教宣教の目的で日本のキリスト教界から紹介されたラトゥーレットは、教会史家として、信頼されるアメリカのキリスト教界の知性として日本での認知度が上がった。その結果、1965年にアメリカで出刊された本Christianity through the ages<sup>(84)</sup>が小黒薫(1914-2004)によって『キリスト教の歩み』<sup>(85)</sup>というタイトルで日本に紹介された。

## b. 日本における中国キリスト教史研究書の中のラトウーレット

### ：受容者の「土着化」概念によるラトウーレット克服への試み

日本のキリスト教界では、1970年代になってから本格的に中国キリスト教史の研究書が登場する。国際キリスト教大学（ICU）で中国史を教えた山本澄子（1914-97）が発行した『中国キリスト教史研究：プロテスタントの「土着化」を中心に』<sup>(86)</sup>がその一つの成果だ。この本の序文を見ると、東アジア・キリスト教史研究のアプローチ方法を（1）宣教師中心、（2）受容者（土着民）中心に分け、自身は後者の研究に焦点を当てていることを述べる。同時に、前者の最も代表的な研究成果としてラトウーレットを挙げている。

東アジアのキリスト教史を研究する場合に、二つの方向がある。一つはアジアに渡来した欧米宣教師の伝道活動を中心とする歴史であり、他の一つは東アジアの国の人々がつくった教会を中心とする歴史である。これらの二つの密接な相互関係を有してはいるけれども、それぞれ異なった性格をもっている。前者についてはラトウーレットの業績をはじめ、これまでに幾つかの優れた研究があり、それはそれとして興味深い問題を解明しているが、本書で考察するのは主として後者である。後者はその国の歴史・民族・文化等と密着した関係にあるばかりでなく、キリスト教が東アジアに根を下すことができるか否かという究極的な課題が、この後者の中に含まれているのである<sup>(87)</sup>。

このように「宣教師業績中心の中国キリスト教史敘述」の代表的成果として山本は、ラトウーレットの代表作2冊<sup>(88)</sup>を中心に参考文献として紹介している。この本は、ICUの理事長を歴任したラトウーレットの影響下で執筆されたと考えられる。したがって、序文からこの分野で最も卓越した先行研究としてラトウーレットを紹介した。敗戦後、日

本でラトゥーレットの中国キリスト教史研究が正当に評価されたことをここで知ることができる。

山本は第1章「教会の自立と合同の努力」(1907-1921)の第1節「外国宣教師による合同運動と中国教会育成運動」で、ラトゥーレットの*A History of Christian missions in China*の内容<sup>(89)</sup>を2ページにわたって詳しく引用している。また、末尾の「付録-文献目録」紹介では「中国プロテスタント史については、本書のテーマと関するもの、とくにこれまでの日本で知られていない中国人の著述に重点をおき、19世紀の外国宣教師の漢文著書や宣教活動の記録等は省略したものが多し」<sup>(90)</sup>とし、省略された宣教師活動に関する内容は、Latourette, Kenneth Scott, *A history of Christian mission in China*, London, 1929.などを参照するように述べている。

それ以降、中国のキリスト教史に関する研究書が続々と出され、新しい観点と解釈が登場<sup>(91)</sup>するが、ラトゥーレットは日本でも中国及び東アジア・キリスト教史の研究分野において最も重要な参考資料の提供者として認められた。しかし、いまだ日本キリスト教史学界に広く知られた状態ではない。それは「反宣教史的」雰囲気が強かった日本のキリスト教の伝統の中で、宣教師研究が進まなかった現実と深い関係があるだろう。

#### 4. 韓国における宗教的な受容過程

##### (1) 白樂濬の『韓国改新教史』(1926)と「宣教史観」形成

韓国におけるラトゥーレットの存在は、まず「韓国キリスト教史」の開拓者である白樂濬ベク ラクジュンのエル大学指導教授として広く知られている。白樂濬はラトゥーレットについて「人格が透明な方で、表裏がなく、会えば会うほどに印象深い学者であり、繊細な性格で正直な方」<sup>(92)</sup>と述

べた。白は渡米前からすでにラトゥーレットの著書を読み、彼の東洋史研究の方法論を学ぶためにエール大学を選択した。ラトゥーレットは白に「韓国改新教（プロテスタント）史」の研究を提案し、ラトゥーレットの指導の下で史料中心の客観的歴史方法論を習得すると同時に、キリスト教、あるいは西洋宣教師中心の史観を受け入れた。それは20世紀初期の植民地下で西洋のキリスト教が朝鮮を新しくさせ、これからもそうするだろうという確信の結果であった。

白は、1927年6月に『*The Protestant Mission in Korea : 1832-1910*』というタイトルの博士論文をエール大に提出し、2年後には崇実専門学校でも書物として出版された<sup>(93)</sup>。この本の序文はラトゥーレットが書いたが、白の論文に対して韓国キリスト教史研究の最高レベルの成果だとほめたてている。

西洋史家の方法応用に十分な訓練を受け、…初期韓国プロテスタント教会の活動を記録した最初のこの成果はほぼ完璧である。この時期の歴史について、再び研究をする必要がないくらいだ。…韓国プロテスタント教会の伝来史に関心ある人は、誰も白博士の恩恵を受けるだろう<sup>(94)</sup>。

実際、白楽濬の『韓国改新教史』は、現在も同分野の研究者の必読書である。白自らも序文の中で、この成果はラトゥーレットのいわゆる「宣教史観」を継承したとしている。

キリスト教史は、その本質から「宣教史」である。また必ず「宣教史」にならなければならない。キリスト教史は自初至終、宣教史として一貫して来た。このような立場から見ると、私たちの（韓国の訳者註）プロテスタント教会史も「宣教史」にならなければならない<sup>(95)</sup>。

特に白は、ラトゥーレットの論文「The Study of the History of the Mission」の方法論とその中の「宣教史観」を模範とした<sup>(96)</sup>。しかし、白の『韓国改新教史』は当時の代表的な日本人の朝鮮カトリック研究者である山口正之 (1901-1964)<sup>(97)</sup> の書評によって根本的な欠落と限界を指摘されている。「青丘学会」<sup>(98)</sup> が発行した学術誌『青丘学叢』第7号 (1932年2月) に紹介された山口の書評を紹介するが、『朝鮮西教史』<sup>(99)</sup> の著者である山口は、朝鮮カトリック史研究者の立場から今まで扱われなかったプロテスタント教会史研究が追加されたことを歓迎している。「名著」であると称賛しながら、彼の歴史方法論にはエール大の指導教授ラトゥーレットの影響が大きいと再確認した。書評の末尾では「文献学的構成の美に恍惚となる」と高く評価している。

かかる時期に、その重要な一部門を構成するプロテスタント伝道史に関するアカデミックな名著を迎えたことを深く喜ばねばならぬ。本書は京城延禧専門学校文科科長白樂濬氏が母校エール大学に提出して学位を獲たところのものであり、その学術的価値についてはすでに定評あるところである。(略) 白教授は、(略) 近代西欧文化の伝達者として宣教師の活動が半島の政治・経済・教育・思想に如何なる変異を生起せしめたかといふ、文化現象としてのキリスト教の価値に注意を向けている。従って、如何なる宗派に対しても、冷静な客観的態度を持し、特に天主教に対しては公平に其の努力を認識しているといえる。かくの如く宗教史を全関連的な文化現象としてのみ意識せんとする新史観は著者の師事したエール大学ラトゥーレット博士 (かかる意図に基いて近年公刊されたのに有名なる支那キリスト教史がある) の提唱するところであり、その余流を本書に見るは極めて当然なことである。而も著者は厳正な而も豊富な史料を縦横に駆使して半言隻句も忽せにしない。

欧文史料は殆ど全部網羅されているかの観があり、全編七章四一三頁を

通じて脚注一五七四を観るとき、吾等は著者の辛勞を忘れてその文献学的構成の美に恍惚となる。それに附録には引用書目を掲げ、索引を附して、まさに至れり尽せりである。次に本書がもつ全面的基本的欠陥とでもいふべきは、朝鮮側の史料が一切黙殺されていることである。これは著者のアルバイトが主として米国に於てなされたことから致し方はないが、本国の資料を無視して、かかる宗教史の文化的研究が可能なりやといふ根本疑義は永遠に残る<sup>(100)</sup>。

しかし山口は、ここで根本的な欠落として「朝鮮側の史料が一切黙殺された」という点を挙げている。「本国の資料を無視して、かかる宗教史の文化的研究が可能なりやといふ根本疑義は永遠に残る」<sup>(101)</sup>と、東アジアのキリスト教受容者の立場と観点が反映された邦語史料の使用と観点の考察を促し、ラトゥーレットのいわゆる「宣教師中心史観」を迂迴的に批判している。

## (2) ラトゥーレットの日本理解と戦時下における白樂濬の歩み

では、日中戦争（1937）以降、より激化していった戦時下体制のもとで韓国で活動した白樂濬は自身の師であるラトゥーレットの著作からどのような影響を受けたのだろうか。1933年にアメリカで初めて紹介された*The Chinese : their history and culture*, vol.1-2は、翌年（1934）再版され、「再版の序文」でラトゥーレットは1931年の満州事変直後に日本によって満洲国が建てられ、中国での日本の影響力が拡大していく現象を次のように肯定的に評価し、賛辞に近い言葉を述べている。

満洲における日本の地位は強化されてきた。一九三四年の春には溥儀執政が満洲国皇帝として即位され、かくてその政治に一さう大きな安定の外観を与へている。さらに鉄道建設は新国家を朝鮮および日本に一さう密接

に結び付けている。主なる列強ははの承認を控えている。支那の感情は以前として非妥協的であるが、しかし怨恨は危機を過ぎ去り、新たな日本の進出の再びこれを燃え上がらせるに足るほど著しいものはなかつた。(略) 一九三四年の春の日本の声明は、事実上、日本は支那全体をその特殊権益圏と考えると世界に警告したものであるが、西洋列強の現在日本のヘゲモニーに挑戦しようとしているものはないやうである。島帝国は今や極東において最高の優位にある。蒋介石はひきつづき支那政府内の顔役である<sup>(102)</sup>。

ラトゥーレットは、日本によって「満洲国」が建てられたのは、「日本-朝鮮-満洲」につながる「大日本帝国」の膨張の自然な流れとして把握している。そして、中国全土を日本が「権益圏」として考え、さらなる膨張を試みるという宣言に対しても「挑戦する国はないし、島帝国(日本)は今こそ極東の最強者」と煽っている。これは、全面的にロシアと中国勢力の南進と東進を警戒していた米国の立場を代弁している。日本帝国の膨張は、すなわち米国の利益と直結するという考えであり、その過程で朝鮮の植民地状況に同情するような見解は見られない。

エール大学での博士の学位取得を終え帰国してから、延禧専門学校文科科長となった白は、1934年に発表されたこの本の「再版の序文」に接したはずである。延禧専門学校(現、延世大学)図書館には、1940年に発刊された『支那の歴史と文化』<sup>(103)</sup>上巻と、翌年出された下巻が今も所蔵されている。当然、白も日本帝国の覇権を認め、その恒久的な膨張の可能性を高く評価した恩師の「再版の序文」を、英語と日本語で読んだはずである。このような恩師の「戦時下における日本理解」は、厳しい時代に「興業倶楽部事件」(1938)などで苦難を経験しながら、少なからず影響を及ぼしたと考えられる。

確かに、白が本格的な親日(戦争協力)の歩みを始めた1940年前後

と、ラトゥーレットのこのような理解が公表された時期は一致している。「白原楽濬」と創氏したのと同時に、1940年1月には平壤、安州、平西3老会連合で開かれた「日本紀元2600年奉祝信徒大会」の場において「総後基督者の使命」という題で演説を行った。1941年8月には、「臨戦対策協議会」に参加して「英米の民情と植民政策」という発表を行い、「東亜新秩序の建設のための聖戦の名が完全に道義的」とであると述べた。1942年5月20日には『基督教新聞』の編集委員として「私たち半島民衆は天皇陛下の(略)皇恩に報いる道が制限されていた。しかし、これから朝鮮の兵役の実施を決めたので(略)我々は祖国日本を決死守護し、皇化を宇内に広げて皇威を四海にふるう」と徴兵制の朝鮮導入を歓迎した<sup>(104)</sup>。1942年5月27日の『基督教新聞』では次のように述べている。

我々日本においては、我々の命とすべての活動が天皇に捧げられるものです。(略)我々は皇恩の広大無辺さに感謝と感激をもって、その恩恵に報いるために盡忠竭力するだけです<sup>(105)</sup>。

さらに、日中戦争勃発5年を迎えた1942年7月1日の『基督教新聞』社説では、大東亜戦争は英米排撃のための国是を実現する支那事変の精神をそのまま受け継いでいると述べ、その思想的な基礎として「八紘一宇」を提示している。

大東亜戦争は、支那事変の意義をそのまま受け継いだものである。帝国は肇国の精神に基づいて万邦へとそれぞれその場を得て、八紘を一字にしてこそ、世界に平和をもたらすのである。大東亜戦争ではその征戦の範囲が東亜攪乱の張本人である英米等国に及んだだけである。支那事変を完遂し、大東亜共栄圏を確立することは、日本帝国の不動の国是である<sup>(106)</sup>。

白は、大東亜戦争 (1942) が満州事変 (1931) と日中戦争 (支那事変, 1937) の意義をそのまま継承したものだと考えたが、基本的にこのような立場は西欧 (特に米国) 中心的、宣教師中心的な観点に陥り、東アジアで日本帝国が拡大して行く覇権に肯定的、友好的な態度を取っていたラトゥーレットの見解を一次的に受容し、日本帝国を認め、受け入れた可能性が高い。しかし、残念ながら恩師の見解を受け入れた瞬間、恩師の国を「徹底的に撃滅」させようという論理に帰結するという矛盾に陥ったのである。師弟の間に生じたこのような悲劇的な状況の演出は、結局、近代西洋の帝国主義をキリスト教宣教の一方便として考え、温情的な態度を取っていたラトゥーレットの「宣教史観」が持っていた根源的な限界であった。

### (3) 解放以後のラトゥーレット紹介

白以外にも、長老教会の来韓宣教師であるサムエル・モフェット (Samuel Hugh Moffett, 馬三楽, 1916-2015) が博士論文『*The Relation of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America to the Missions and Church Connected with it in China*』(1945) を、メソヂスト教会の来韓宣教師であるストックス (Charles D. Stokes, 都益瑞, 1882-1968) も同様に博士論文『*History of Methodist Missions in Koera, 1885-1930*』(1947)<sup>(107)</sup> を、ラトゥーレットの指導の下でエール大に提出した。マフェットは長老会神学大学で教会史を教え、ストックスは1954年に大田メソヂスト神学大学 (現、牧園大学) を設立した後に教会史を講義した。そのような面で、ラトゥーレットの二人のアメリカ人宣教師である弟子は、解放以後にも韓国の神学生にラトゥーレットのキリスト教史の方法論と思想を間接的に教え、少なからず影響を及ぼした。特に、マフェットは『アジアキリスト教会史』(全1-2巻)<sup>(108)</sup> を執筆したが、その書物もラトゥーレットから大

きな影響を受けた物であった。

白，マフェット，ストックスなど，ラトゥーレットの弟子が韓国のキリスト教史研究に影響を及ぼしたにもかかわらず，ラトゥーレットの著書がハングルで本格的に翻訳されたのは1980年代からである。例えば1968年に日本語に翻訳された『キリスト教の歩み』（*Christianity through the ages*）<sup>(109)</sup>が，韓国では1986年になってから出版された。<sup>(110)</sup> 翻訳者である許虎益<sup>ホホイク</sup>は，延世大博士課程で研究していた時，白樂濬元総長のT. A.として活動したので，その影響の下，翻訳したはずである。ラトゥーレットの名声とは異なり，日本で翻訳された時期より20-30年程遅れたのは，長年続いた植民地の状態と朝鮮戦争や軍事独裁など，韓国学界が研究に邁進するには困難な歴史的背景を考慮する必要がある。

## 5. おわりに

東アジア三国において，ラトゥーレット（K. S. Latourette）の東洋史（特に中国史）およびキリスト教史研究がどのように受容され，理解されて来たのかを考察した。帝国主義の膨張が絶頂に至った時期，（1）過去の帝国（中国），（2）新しい帝国（日本），（3）植民地（韓国）という三つの立場は，ラトゥーレットのキリスト教史と東洋史を受容する時にも互いに異なる状況を生み出した。

<ラトゥーレットに対する日・中・韓の受容過程と理解の比較>

区分	中国	日本	韓国
主な受容者	キリスト者	非キリスト者	キリスト者及び 宣教師
ラトゥーレットへの 立場	批判的 (キリスト者であつても西洋中心史観を批判的に受容)	政治的肯定 (非キリスト者でも近代と帝国の観点を肯定的に受容)	宗教的肯定 (キリスト者として宣教の拡張に注目した肯定的受容)
弟子	1名 (刘廷芳)	なし	3名 (白樂濬, マフェット, ストックス)
翻訳・出版	過去はないが最近急増	戦時下における国家(政府)主導の翻訳・出版	戦後におけるキリスト教界主導の紹介と学校での継承

中国は、西洋帝国からの侵略を経験しながらアジアでの支配力を急速に喪失した。このような被害意識と西欧に対する拒否感から、キリスト教が中国で貢献した点を認めながらもラトゥーレットのような強い西欧(米国)中心、宣教師中心の観点から記述された中国キリスト教史に対しては批判的であった。したがって、キリスト教受容者の立場で新しく中国キリスト教史を編纂しようとする努力を見せた。その結果、長年中国ではラトゥーレットのキリスト教史とその史観が否定的な評価を受けた。結局研究対象としても排除され、その観点を継承する研究者もなかった。しかし、最近中国が急浮上しながら自信を回復しアメリカに匹敵する時代を迎え、ラトゥーレットの成果に対する再評価が試みられているので、その成果が期待される。

日本は、キリスト教史「通史書」が非キリスト教界に属している研究者によって主導されたほど、キリスト教史が西洋を理解するための一要素として考えられた。すなわち、「和魂洋才」と「脱亜入欧」を達成する手段としてキリスト教史研究に着手したのである。その結果、帝国

膨張に寄与した宣教師の献身的な努力は、模範としなければならない開拓精神として評価された。いわゆる「宣教史観」を追い求めたラトゥーレットの歴史観も、そのような近代日本の特殊性の中で歪曲され、受容された。日本のキリスト教史「通史書」にラトゥーレットが初めて登場する時点も、満州事変（1931）直後に大陸進出が本格化し、中国への理解が要求されてからである。すなわち、ラトゥーレットの研究成果は、大陸進出と連結する日本の国家的利益と関わりあるものとして紹介された。最初の訳書である『中国の歴史と文化』（1940）も「南満州鉄道」の派遣調査員が紹介した。この本の「再版序文」（1934）でラトゥーレットは膨張して行く日本帝国の「覇権」に、肯定的かつ友好的な評価を下した。桂・タフト密約以後、日本の膨張をアメリカの国家的利益と関連させて解釈した延長線上の結果である。敗戦後にラトゥーレットはICUの理事長として赴任したが、その時からキリスト教界に新しく紹介され始める。大陸侵略に活用された「中国史学者」ではなく、「キリスト教史学者」としての再評価が行われた。その結果、ICUの山本教授は『中国キリスト教史研究』を本格化し、ラトゥーレットを「東アジア・キリスト教史研究」における最も重要な先行研究として評価した。しかし、同時に西欧宣教師中心の史観の限界を指摘し、東アジアにおけるキリスト教受容者の観点を反映させることを求めた。すなわち、「宣教史観」の限界を「土着教会史観」によって克服させようとする試みであった。

韓国では、「宣教史観」の伝道師である白樂濬の恩師として広く知られた。ラトゥーレットの強者中心の歴史観は、戦時下の朝鮮半島で活躍した弟子、白樂濬に日本の帝国主義膨張論（大東亜共栄圏、新東亜秩序建設）を支持するように説得する要因になった。しかし、数年後、太平洋戦争で師弟の立場が対立する矛盾を生み出すこととなった。これは、ラトゥーレットが主張した西欧中心、宣教師中心、強者中心の帝国主義的教会史観が持っていた根本的な限界の結末である。ただ、国家主導で

ラトゥーレットを受容した日本とは異なり、白、マフェット、ストックスなどのキリスト教界の研究者によって紹介されたという特徴もある。しかし、ラトゥーレットの史観が持つ問題点は、韓国キリスト教史学界でも「民族教会史観」、「土着教会史観」、「民衆教会史観」などの登場とともに批判に直面した。ラトゥーレット及び白楽濬の「宣教史観」を克服しようとする試みは今も行われているが、このような現象は中国が最も早く、日本の敗戦、韓国の解放以後、日本と韓国における学界で共通する現象として表れている。このようにみると、日本、中国、韓国でのラトゥーレット受容史は、東アジア・キリスト教史研究の現在を検討し、未来を展望するためにも非常に重要な互いの「他山之石」になるだろう。

注

- (1) Ricard R. Pointer, "Kenneth Scott Latourette," in *Historians of the Christian Tradition : Their Methodology and Influence on Western Thought* (Nashville: Broadman & Holman, 1995) , pp.416-418.
- (2) Ricard R. Pointer, "Kenneth Scott Latourette," p.420.
- (3) K. S. Latourette, *The development of China*, Boston; New York : Houghton Mifflin, 1917.
- (4) K. S. Latourette, *The development of Japan*, New York: The Macmillan Company, 1918.
- (5) K. S. Latourette, *Beyond the Ranges: An Autography*, (Grand Rapids, MI : Eerdmans, 1967) , pp. 50-51.
- (6) K. S. Latourette, *The history of early relations between the United States and China, 1784-1844*, New Haven, Conn., Yale University Press, 1917.
- (7) K. S. Latourette, *The Chinese : Their History and Culture*, First edition, 1934, 2 vols, Second edition revised two volumes in one, 1934, 1938, New York.

- (8) William Richey Hogg, “Kenneth Scott Latourette 1884–1968 : Interpreter of the Expansion of Christianity,” in *Mission Legacies*, 417. ; 李在根 (이재근), “『중국그리스도교선교역사』 (*A History of Christian Missions in China*) 에 나타난 케네스 스코트 라투레트의 基督教 宣教 및 歷史觀,” 아시아기독교사학회 제7회 정기학술대회, 2015年4月11日, p.5.
- (9) Samuel Wells Williams, *The Middle Kingdom: a survey of the geography, government, literature, social life, arts, and history of the Chinese empire and its inhabitants* (New York; Scribner's 1882; first edition New York: Wiley & Putnam, 1848)
- (10) 薛チュンス (설충수), “라투레트와 중국, 그리고 중국 기독교,” 「라투레트와 아시아기독교사」, 아시아기독교사학회 제7회 정기학술대회, 2015年4月11日, p.45.
- (11) K. S. Latourette, *Beyond the Ranges: An Autography*, p.40.
- (12) K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, (New York : Macmilan, 1929) , pp.824-825.
- (13) 李在根, 前掲書, p.3.
- (14) K. S. Latourette, *Beyond the Ranges*, 56. ; *A History of Christian Missions in China*, vii.
- (15) 라투레트는, 基督教의 純機能을 強調するため 其의 根拠として, (1) 相當な規模의 基督教 共同体가 誕生, (2) 中國革命의 리더의 育成, (3) 新式教育의 拡大와 識字運動, (4) 公共福利의 増大, (5) 倫理道德의 強化, (6) 個人尊重의 文化高揚, (7) 文書出版의 普及, (8) 傳統宗教의 解体와 崩壞などを 提示する。特に 淸國을 崩壞させて 西歐的な 共和國을 立てた 革命家の中に 宣教師의 教育을 受けた 人가 多かたと 強調した。(K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, 835.)
- (16) K. S. Latourette, *Beyond the Ranges*, pp.43-44.
- (17) K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, viii.
- (18) K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, p.4.
- (19) K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, vii.
- (20) K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, pp.842-843.
- (21) Ricard R. Pointer, “Kenneth Scott Latourette,” pp.423-424.

- (22) 薛チュンス (설충수), “라투렛과 중국 그리고 중국기독교,” pp.46-47.
- (23) 俞祖华、胡瑞琴, “近代西方来华传教士的儒学观,” 『齐鲁学刊』 (2007年第3期) と延瑞芳, “晚清来华传教士“孔子加耶稣”主张试析” (<http://www.sinoss.net/show.php?contentid=28151>, 2015년4월7일) .
- (24) 王思聪, “赖德烈中国学的纬度、逻辑及评价,” p.117.; 薛チュンス, 前掲書, p.47.
- (25) K. S. Latourette, *The United States Moves across the Pacific*, (New York, London: Haper&Bros, 1946) , p.92.
- (26) 王思聪, “赖德烈中国学的纬度、逻辑及评价”, p.119.; 薛チュンス, 前掲書, p.48.
- (27) 蔡咏春, 《译书书目》(无日期, 北京大学档案馆, 宗卷号 YJ44009, 顺序号 3); 薛チュンス, 前掲書, p.48.
- (28) K. S. Latourette, *The United States Moves across the Pacific*, (New York, London: Harper&Bros, 1946) , p.92.
- (29) 以骅, “教会史学家王治心与他的《中国基督教史纲》,” 『中国基督教史纲』, 上海古籍出版社, 2004, p.3.
- (30) (a) 景教: 陈垣、《元也里可温考》(1925)、《开封一赐乐业考》(1900)、冯承钧、《景教碑考》(1931)、《元代白话碑》(1930)、(b) カトリック教会史: 徐宗泽 (徐光启の孫)、《中国天主教传教史概论》(明末時代に執筆)、(c) プロテスタント教会史: 谢洪赉、《中国耶稣教布道小史》(1918); 张钦士、《国内近十年来之宗教思潮》(1927); 张亦镜、《批评非基督教言行汇刊》(1927) など。
- (31) 王治心, 『中国基督教史纲』(上海古籍出版社, 2004), 3; 薛チュンス, 前掲書, p.48.
- (32) 薛チュンス (설충수), “라투렛과 중국 그리고 중국기독교,” p.50.
- (33) K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, 1929, pp.23-24.
- (34) 王治心, 『中国基督教史纲』, pp.6-14.; 薛チュンス (설충수), 前掲書, p.51.
- (35) その根拠として王は, キリスト教の唯一神信仰が, 宇宙創造, 万有の主宰としての中国固有の「天」(上帝) 概念と等しいと考えた。また, キリスト教の「愛」が儒教の「仁者愛人」思想とも通ずるので, キリスト教と中国文化は融合できると考えた。(王治心, 『中国基督教史綱』,

pp.15-21 ; 薛チュンス (설충수), 前掲書, p.52.)

- (36) 赖德烈著, 吕浦, 孙瑞芹译, 『现代中国史』, 北京: 商务印书馆, 1963.
- (37) 赖德烈著; 雷立柏等译, 『基督教在华傳教史』, 香港: 道風書社, 2009.
- (38) 徐以骅が書いた「教会史学家王治心与他的『中国基督教史纲』」(2003) という論文が代表的である。
- (39) 刘艳艳, “赖德烈的中国学研究”, 华东师范大学, 硕士论文, 2009.
- (40) 王思聪, “赖德烈的中国学研究”, 北京外国语大学, 博士论文, 2014.; 王思聪, “赖德烈美国中国学的维度、比较与特色“, <学术界> 2014年(6期). ; 王思聪, “赖德烈中国学的维度、逻辑及评价“, <北京社会科学> 2014年10期.
- (41) 曾慶豹, “近代中國基督(新)教史研究述評,” <國史研究通訊> 7, 2014年12月, pp.50-52.
- (42) 薛チュンス (설충수), “라투렛과 중국 그리고 중국기독교”, p.53.
- (43) ラトゥーレット自身も次のように自分の根本的な限界を指摘し, 課題としてあげている。:「この本は, 特に「中国におけるキリスト教宣教の歴史」という書名に決め, このように外国の要素を浮上させたもので, 決して「中国キリスト教史」(*A History of the Christian Church in China*)ではない。私は, これから中国人の中に, 後者の角度(観点)から出発して新たな通史を記録することを望む。」(K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, 1929, “Preface,” pp.7-8.)
- (44) John Fletcher Hurst, *Short history of the Christian church*, Harper & Brothers, 1902, c1892.; A.C. Jennings, *A manual of church history*, Hodder and Stoughton, 1888.; 藤谷深励, 『基督教史』, p.3.
- (45) 藤谷深励, 『基督教史』(東京: 博文館, 1909). (帝国百科全書; 第190編).
- (46) 藤谷深励, 『基督教史』, p.4.
- (47) 後藤朝太郎(1881-1945)は, 東京帝国大学中国語学を専攻した。1911年(明治44)に大学院に進学した彼は, 文部省, 台湾総督府, 朝鮮総督府囑託を経て, その後, 日本大学教授と東京帝国大学講師として活躍した。
- (48) 藤谷深励, 『基督教史』, pp.259-260.

- (49) 氣賀重躬,『概説教會史』, (東京: 日獨書院邦文部, 1932); 氣賀重躬,『キリスト教史』, (東京: 和田書店, 1953)
- (50) 石原謙,『基督教史』 (東京: 岩波書店, 1934) .
- (51) 石原謙,『基督教史』, p.297.
- (52) 石原謙,『基督教史』, pp.297-298.
- (53) K. S. Latourette, *The Chinese : Their History and Culture*, First edition, 1934, 2 vols, Second edition revised, two volumes in one, 1934, 1938, New York.
- (54) K. S. Latourette, *A history of Christian missions in China*, New York: Macmillan Co. 1929.
- (55) 石原謙,『基督教史』, p.298.
- (56) 石原謙,『基督教史』, p.300.
- (57) 石原謙,『基督教史』, pp.301-302.
- (58) “支那の国際化と鉄道, 満蒙鉄道は其の範囲外,” 「満州日日新聞」1921年 (大正10) 12月2日.; 『新聞記事文庫: 鉄道』, pp.17-57.; 「データ作成: 2002.6 神戸大学附属図書館」; [http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=00101100&TYPE=HTML\\_FILE&POS=1](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=00101100&TYPE=HTML_FILE&POS=1)
- (59) “支那の国際化と鉄道, 満蒙鉄道は其の範囲外,” 「満州日日新聞」1921年12月2일자.
- (60) “支那の国際化と鉄道, 満蒙鉄道は其の範囲外,” 「満州日日新聞」1921年12月2일자.
- (61) 「上海満鐵調査資料: 第11篇 満鐵支那月誌特刊」, 『支那研究: 支那研究及研究機關に關する調査』 (野中時雄, 南滿洲鐵道株式會社上海事務所研究室編, 上海, 1932年12月, 南滿洲鐵道株式會社上海事務所發行)
- (62) K. S. Latourette, *The Chinese : their history and culture*, v.1-2, 2nd ed. Rev. New York : Macmillan Co. 1933-1934.
- (63) ケネス・スコット・ラトゥーレット, 岡崎三郎譯, 『支那の歴史と文化』 (上, 下巻), (東京: 生活社, 1939-1941) .
- (64) ケネス・スコット・ラトゥーレット, 岡崎三郎譯, 『支那の歴史と文化』 (上巻), p.1.
- (65) 白鳥庫吉は, 満鉄を韓国史及び大陸史歪曲の先進基地とみなした。満

鉄は外見は株式会社だったが、事実上日本帝国が直接経営する侵略目的の国営会社であった。白鳥は、満鉄の総裁に歴史研究の重要性を主張し、東京支社に「満鮮地理歴史調査室」を設置するよう、1908に本格的に研究及び調査活動を開始した。特に、この調査室で活躍した津田左右吉は、1913年に『朝鮮歴史地理』と『満州歴史地理』各二巻を出版し、これは日本の史学界において、いわゆる「実証主義」を掲げた「植民地史観」の論理を集大成したものだ。この書物が再び朝鮮総督府傘下に設置された「朝鮮史編修会」の基本的理論の土台を形成した。

- (66) バクストン(Buxton, Leonard Halford Dudley), 岡崎三郎譯,『支那』(東京:中央公論社,1933)
- (67) 支那問題辞典編集部編,『支那問題辞典』(東京:中央公論社,1942)
- (68) 矢野仁一,“アジア歴史叢書發刊の辭,” 矢野仁一, 内藤雋輔共著,『支那の歴史と文化』(東京:目黒書店,1941) pp.2-3.
- (69) 矢野仁一,『近世支那外交史』, 東京:弘文堂書房, 1930, p738.
- (70) 矢野仁一,“アジア歴史叢書發刊の辭,”『支那の歴史と文化』, pp.3-4.
- (71) 矢野仁一,“アジア歴史叢書發刊の辭”,『支那の歴史と文化』, pp.4-5.
- (72) 野上俊靜,「<批評・紹介>朝鮮史研究 内藤雋輔著」,『東洋史研究』, 1962年3月31日, 第20巻第4号, 東洋史研究会, pp.516-520.
- (73) 内藤雋輔,“はしがき,” 矢野仁一, 内藤雋輔共著,『支那の歴史と文化』(東京:目黒書店,1941) pp.7-8.
- (74) 竹森満佐,『満洲基督教史話』, 東京:新生堂, 1940.; 鷺山第三郎,『支那天主教教会の実情』, 東京:福村書店, 1941.
- (75) 比屋根安定,『支那基督教史』〔東亞叢書〕(東京:生活社,1940)
- (76) 溝口靖夫,『東洋文化史上の基督教』, 東京:理想社出版部, 1941.
- (77) 溝口靖夫,『東洋文化史上の基督教』, p.200.
- (78) 溝口靖夫,『東洋文化史上の基督教』, p.202.
- (79) 「Kenneth Scott Latourette, the distinguished professor of the History of Christianity at Yale University Divinity School, succeeded Diffendorfer after his death in 1951.」(<http://www.jicuf.org/new-page/>); Japan ICU Foundation ホームページ参照。
- (80) ラトゥーレット・ケネス・スコット,「極東におけるキリスト教布

- 教問題」, 『ワールド・リスナー』3 (5), リスナー社, 1949年5月, pp.60-71. ; Meribeth E. Cameron, Thomas H. D. Mahoney and George E. McReynolds ; with a foreword by K. S. Latourette, *China, Japan and the powers*, New York: Ronald Press Co. 1952. ; K. S. Latourette, *A short history of the Far East*, 3rd ed. New York: Macmillan, 1957. ; K. S. Latourette, *The history of Japan*, Rev. ed. New York: Macmillan, 1957.
- (81) ケンネス・スコット・ラトゥーレット編, 岡田五作訳, 『福音と教会と世界』(東京: 逍遙書院, 1950)
- (82) ケンネス・スコット・ラトゥーレット編, 岡田五作訳, 「序文」, 『福音と教会と世界』, pp.1-3.
- (83) 第2部「教会と世界」: 第4章「歴史の展望に於ける今日の教会とキリスト教社会」(ケンネス・スコット・ラトゥーレット); 第5章「社会に対する教会の責任」(リチャード・ニーバー)
- (84) K. S. Latourette, *Christianity through the ages*, 1st ed. New York: Harper & Row, 1965.
- (85) ラトゥーレット, 小黒薫譯, 『キリスト教の歩み 1, 宗教改革前夜まで』(東京: 新教出版社, 1968); ラトゥーレット, 小黒薫譯, 『キリスト教の歩み 2, 宗教改革から現代まで』(東京: 新教出版社, 1968)
- (86) 山本澄子, 「序論」, 『中国キリスト教史研究: プロテスタントの「土着化」を中心として』(東京: 近代中国研究委員会, 1972)
- (87) 山本澄子, 「序論」, 『中国キリスト教史研究』, p.3.
- (88) K. S. Latourette, *A history of Christian mission in China*, London, 1929. ; K. S. Latourette, *A history of the expansion of Christianity*, vol.VIII, New York, 1945.
- (89) K. S. Latourette, *A history of Christian missions*, p.262. ; 山本澄子, 『中国キリスト教史研究』, p.46.
- (90) 山本澄子, 「附録-文献目録」, 『中国キリスト教史研究』, p.22.
- (91) ジャック・ジェルネ, 鎌田博夫訳, 『中国とキリスト教 最初の対決』(東京: 法政大学出版局, 1996)
- (92) 白樂濬, “나의交友半世紀,” 『白樂濬全集』, 제9권, p.294.
- (93) Lark-June George Paik, *The history of Protestant missions in Korea, 1832-*

- 1910, New Haven : Graduate School, Yale University, 1927. ; L. George Paik, *The history of Protestant missions in Korea, 1832-1910*, Pyongyang: Union Christian College Press, 1929. ; 韓国語への翻訳出版は1973年に達成した。 ; 白樂濬, 『韓國改新教史: 1832-1910』 (서울: 延世大學校出版部, 1973)
- (94) 白樂濬, 『韓國改新教史: 1832-1910』 (서울: 延世大學校出版部, 1973) , iv.
- (95) 白樂濬, 「自序」, 『韓國改新教史: 1832-1910』, ソウル: 延世大學校出版部, 1973, v-vi.
- (96) K. S. Latourette, "The Study of the History of the Mission," *International Review of Mission* 14 (1925) , pp.108-115.
- (97) 山口正之は、1910年出生して1929年には京城帝国大学法文学部史学科を卒業し、平壤高等女学校の教師などを勤めながらも1930年に発表した「朝鮮西教史料『己亥日記』」という論文を「青丘学叢」第1号に発表し初め、多数の朝鮮カトリック史関連研究を残した。
- (98) いわゆる「満鮮史観」(殖民主義史観)を強化するため朝鮮総督府の朝鮮史編修会グループが中心に結成された学会である。 ; Horace H. Underwood, *Partial bibliography of occidental works on Korea with a paper on occidental literature on Korea*, Seoul : Chosen Christian College. 1931.
- (99) 山口正之, 『朝鮮西教史: 朝鮮キリスト教の文化史的研究』 (東京: 雄山閣, 1967) ; 山口正之, 『朝鮮キリスト教の文化史的研究: 朝鮮西教史』〔再版〕 (東京: 御茶の水書房, 1985)
- (100) 山口正之, “書評-朝鮮新教史,” 「青丘學叢」第七號, 1932年2月, 青丘學會, pp.145-146.
- (101) 山口正之, “書評-朝鮮新教史,” p.146.
- (102) ケネス・スコット・ラトゥーレット, 岡崎三郎譯, 『支那の歴史と文化』 (上巻), p.5.
- (103) ラトゥーレット, 岡崎三郎, 『支那の歴史と文化』 上巻 (東京: 生活社, 1940) ; ラトゥーレット, 岡崎三郎, 『支那の歴史と文化』 下巻 (東京: 生活社, 1941)
- (104) 親日人名辞典編纂委員会編, 『親日人名事典』 第2巻, ソウル: 民族問

題研究所, 2009年, p.201.

- (105) 庸齋 (白樂濬), “勞動의 精神的 價值”, 『基督教新聞』, 第5号, 1942年5月27日, p.3.
- (106) 庸齋 (白樂濬), “社說-支那事變第五周年을 맞이하여”, 『基督教新聞』, 第10号, 1942年7月1日, 1.
- (107) Charles D. Stokes, 장지철, 金興洙訳, 『美國 監理의會 韓國宣教 歴史: 1885-1930』 (서울: 韓國基督教歴史研究所, 2010)
- (108) Samuel Hugh Moffett, *A History of Christianity in Asia vol.I: Beginnings to 1500* (Marynoll: Orbis Books, 1998) ; Samuel Hugh Moffett, *A History of Christianity in Asia vol.II: 1500 to 1900* (Marynoll: Orbis Books, 2005)
- (109) K. S. Latourette, *Christianity through the ages*, 1st ed. New York: Harper & Row, 1965. ; ラトゥーレット, 小黒薫譯, 『キリスト教の歩み 1, 宗教改革前夜まで』 (東京: 新教出版社, 1968) ; ラトゥーレット, 小黒薫譯, 『キリスト教の歩み 2, 宗教改革から現代まで』 (東京: 新教出版社, 1968)
- (110) K. S. 라트렛, 許虎益譯, 『基督의 歴史』 (서울: 大韓基督教出版社, 1986)